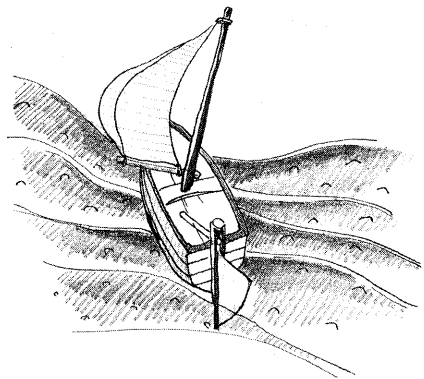


風を知る

ヨットにのって

谷 直樹



「子どもは風の子」というが、子どもは大人より風に敏感かもしれない。趣味でセーリングスクールをしていると、よくこう思うときがある。子どもはその小さい身体にいつもいっぱい風を受けているのが好きだからだろう。試しに子どものまねをしてみよう。

腕を飛行機の翼のようにひろげて走ってみると、風の中を飛んでいる感覚を味わえる。雨傘にわざと強い風を入れて、あおられてみる。くまのプーさん

に出てくるコブタのように小さな身体が空に舞い上がりそうになる。それともメリーポピンズかな。アーサーランサム不朽の名作「ツバメ号とアマゾン号」には、ヨットで冒険をする子どもたちが出てくる。

第二巻の冒頭ではツバメ号が沈没してしまう。原因は強い追い風の中で進路をたもてなくなつて、子どもたちがカマス岩と名付けた鋭く立った岩に激突したためであった。

当時、湖上には風速二〇メートル近い風が吹いていた。湖面は白波が立っており、小型ヨット（ディンギー）がぎりぎり帆走可能な状況であった。ツバメ号には最近のディンギーには滅多に見られなくなった縮帆機能がついていた。が、艇長のジョンは、スピードが落ちるのを嫌って縮帆せずに出航してしまつた。

ヤマネコ島から馬蹄湾へは方位南西の方向だから、北東の追い風なら一直線だ。フルセル（総帆展開）で行けば、風が強くなる前に馬蹄湾に逃げ込める。そうジョン少年が判断したのも無理はない。

飛ぶように快走してきたツバメ号はしかし、風軸を超えて帆船（ブーム）を出す格好になつた。セル（帆）は突然裏帆を打ち、帆船が反対舷にうなりをあげて一気にまわつてしまつた。ヨット用語でいうワイルドジャイブである。

バイキング船のように帆を横に張る帆船と違って、ヨットは帆を縦に張る。そのため追い風の時に

は帆船を左舷か右舷のどちらかの真横に一杯に出して走ることになる。最も不安定な姿勢である。

風が真後ろ（風軸という）なら問題はないが、風軸を境に帆の出し方はいかえなければならぬ。右斜め後ろから風を受けるときは左舷に、左斜め後ろから風を受けるときは右舷に、という具合である。この帆船回転の操作がジャイブである。

少々専門的になつてしまふが、ジャイブが危険なのは、長い帆船が帆柱（マスト）を中心に一八〇度回転するとき非常に大きなモーメントが起きるからだ。通常のジャイブではこのモーメントを軽減させるために、帆船（シート）をゆっくり手繰つていき、また徐々に出していくようにする。

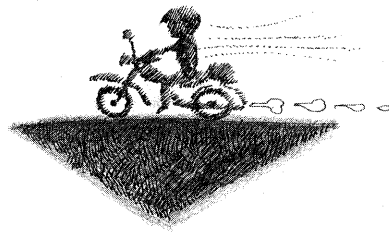
ツバメ号はヤマネコ島からずっと左舷に帆船を出していた。後から考えると馬蹄湾に向かって左手にあるカマス岩をかわすには、ジャイブをする必要があつたのだ。風を左側斜め後ろから受けると、左舷に出した帆の裏側に風が回り込んでワイルドジャイ

トに乗れる機会も多いというイギリスの子どもは、
幸せだと思う。

(十文字学園女子短期大学)

北の国で 風になる

上原 那奈世



この夏休み、北海道の登別温泉で開かれる組合の
幼児教育研修会の誘いを受けた途端、不謹慎にも私
の心は四十代に残したツーリングコース「襟裳岬、
霧多布」に飛んでいました。

北海道一週の旅は、十数年前からのマイカーによ
る何回かのドライブの度に少しずつ膨らんでいきま

した。そして、或る年の幼稚園の七夕祭りの折り
紙「先生も書いて」と子供達が持ってきてくれた短冊
に「四十五歳までに、バイクで北海道一週旅行」と
書いて「馬鹿だなあ先生死んじゃうよ」と担任や子
供たちに冷やかされたこともありました。

それがどうしても思うようになったのは、ポン
コツ車で宗谷岬に向かう海岸線を走っている時のこ